

❑ 古代地中海世界における人々の移動とネットワーク (2) ❑

— Identity, Ethnicity, Acculturation —

報告一

新ポエニ語碑文から見る複数のポエニ文化とその利用

青木 真兵

はじめに

本論では、前一四六年のカルタゴ滅亡後も各地で使用され続けた新ポエニ語への分析を通じて、現地で受け入れられていったポエニ文化に焦点を当てる。

前八世紀、現在のレバノンに拠点を置いていたフェニキア人は、シチリア島、サルデーニャ島などの地中海の島々をはじめ、スペイン南部や北アフリカの沿岸部に植民都市を建設した。これらを西方フェニキア都市という。前六世紀には、その中の一つの都市であるカルタゴが大きく発展

し、その他の西方フェニキア都市を覇権下に置いた。この過程でカルタゴ文化が他の西方フェニキア都市に流入した。これを「ポエニ化」という。このように、一般的にはカルタゴとポエニは同じ意味で用いられることが多い。しかし「ポエニ化」した西方フェニキア都市は、カルタゴと全く同じ文化を有していたのだろうか。

まずはポエニ文化の残存状況が良く、かつ「ローマ化」を遂げたと言われる都市レプキス・マグナに着目し、ポエニ文化とカルタゴ文化の差異を考察していく。

1. レプキス・マグナに残るポエニ文化

レプキス・マグナは考古・建築学的研究において「ローマ化した都市のモデル」として扱われてきた¹⁾。レプキス・マグナは今日のリビア西岸に位置した都市で、前八世紀ごろフェニキア人によって交易港として建設された。その後、西地中海世界で覇権を握ったカルタゴの支配下に入り、前一四六年のカルタゴ滅亡後はヌミディア王国の支配下に入ったと考えられている。前四六年、ローマの将軍カエサルによって属州アフリカ・ノウアに併合され、ローマ初代皇帝アウグストゥスの治世に入ると急速な変容を遂げた。ローマ帝国下において、後七七年に自治市、後一〇九年には植民市の地位を得、レプキス・マグナは属州アフリカで最初のローマ皇帝である、紀元後一九三年に即位したセプテIMIウス・セウエルスを生み出した。

リープス Rives はマウレタニア王国、トゥツガ、レプキス・マグナを「皇帝崇拜」を中心に比較考察し、ローマ帝国下における現地社会の主体性を強調した。なかでもレプキス・マグナは「ローマ化」が早く、ポエニ文化を残したまま、主体的に「ローマ化」していった都市であると位置づけている²⁾。そしてリープスはレプキス・マグナには「古いポエニ文化」である神シャドラパとローマの神リベル・

パートルが祀られていたことに注目しているし、フォンタナ Fontana もポエニ様式の地下墓や土器、建築方法の存在が確認できることから、レプキス・マグナにはポエニ文化が残存していたことを主張している³⁾。また、レプキス・マグナ出身のローマ皇帝セプティミウス・セウエルスの話すらテン語にポエニ語訛りがあつたとか、姉か妹はラテン語が話せなかつたという記述の存在も、レプキス・マグナがポエニ文化を良く残存させたまま「ローマ化」を遂げた証拠として挙げられる。

ちなみに「ローマ化」とは、ローマ・イタリアの文明・言語・文化がローマ帝国下もしくはその範囲を越えて普及していくことと定義され、特に都市文化が根付いていなかった帝国西部において語られてきた。帝国西部は文化を受容するだけの未開地域と考えられてきたが、一九九〇年以降、現地社会の存在が重視され始め、現地社会のエリートがステイタス・シンボルとして「ローマ」を自ら獲得したという、自己ローマ化 self-Romanization と呼べる主張がなされていく。文明はローマによって「与えられた」のではなく、現地社会がそれを「利用した」という、現地住民の主体的な動きが強調された。

属州アフリカ研究は考古資料の残存状況が比較的良好であること、また研究史におけるオリエンタリズムが分かり

やすく、ポスト帝国・植民地主義的立場の研究者が批判しやすかったという状況から、文化・認識論的な批判とともに現地社会の主体性に言及がされた。井副剛は、純粋な文化は存在しないという「文化の混溶性」を前提に、トゥツガの文化が現地社会の「選択・流用」によって形作られていったことを明らかにしている。現地社会の「選択・流用」という視点は、本論で対象とする「ポエニ化」にも適用することができるだろう。

まずポエニとは何なのか。例えば佐藤育子は、カルタゴで信仰された神が変化した例を挙げ、ポエニ文化の成立について述べる。もともとカルタゴの母市テュロスの信仰は「メルカルト神、アシユタルテ神」というセットであり、テュロスの植民市カルタゴも同様の神を信仰していた。しかしカルタゴが大きく発展する時期において、カルタゴの信仰する神が「バアル・ハモン神、タニト神」へと変化する。この変化をカルタゴがフェニキアの段階からポエニの段階へと変化したタイミングとみている。またファンタール *Fantar* は、シチリア島やサルデーニャ島におけるフェニキア人とポエニ人は混同して語られていると述べており、全ての西方フェニキア都市が「ポエニ化」したわけではないと主張する。

レプキス・マグナはポエニ文化を良く残存させたまま

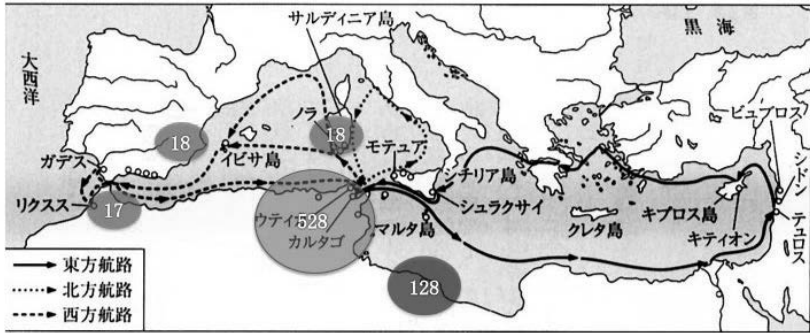
「ローマ化」を遂げたと言われるが、レプキス・マグナに残存するポエニ文化とはカルタゴ文化のことなのである。次章では、新カルタゴ碑文の分析からレプキス・マグナに残るポエニ文化の内実について考察する。

2. 新ポエニ語碑文にみるカルタゴ文化とポエニ文化

本章では新ポエニ語碑文を手がかりに、カルタゴ文化とポエニ文化の比較を行う。前述のとおり、新ポエニ語はカルタゴ滅亡後も使用され続けた言語であった。

新ポエニ語碑文の特徴として、出土した都市が限定されることが挙げられる。また碑文としてしっかりと刻まれているものもあるが、数は多くなく、土器片に記されたものなどが含まれる。また正確な年代を特定できるものは少なく、年代が判明している最後の碑文は、後九二年にレプキス・マグナから出土したものである。本章ではヨンゲリング *Jongeling* の碑文集成を参考に分析を進める。

新ポエニ語碑文の分布地は、大きく三つに分けることができる。もつとも数が多く出土しているのは、現在のチュニア、アルジェリア東部である。この地域はカルタゴ、ヌミディア、ローマが伝統的に支配の中心を置いた地域で、五二八点の新ポエニ語碑文が出土している。二つ目はリビ



栗田伸子、佐藤育子『通商国家カルタゴ』講談社、2009年、160頁とK. Jongeling, *Handbook of Neo-Punic Inscriptions*, Tübingen, 2008.基に発表者作成

図1 新ポエニ語碑文の分布

ア西部のトリポリタニアであり、一二八点出土している。トリポリタニアには、サブラタ、オエア、レブキス・マグナという三つの西方フェニキア都市があった。最後はスペイン南部やシチリア島、サルデーニャ島などで、全てを足しても六〇点に満たない数となっている（図1）。この中で、本論では主に北アフリカ地域から出土したものを分析する。

新ポエニ語碑文の分析に入る前に、ローマ帝国下北アフリカの状況を確認しておこう。ローマによる北アフリカへの直接的な支配はカルタゴを滅ぼした前一四六年に始まる。カルタゴを滅亡させたローマは旧カルタゴ領を接収し、現在のチュニジア北部にあるウティカを中心に属州アフリカを成立させた。一方、現在のアルジェリア東部にあったヌミディア王国の領地やリビア西部のトリポリタニアは、前四六年、カエサルによる退役兵の植民活動によって新たな属州アフリカ（アフリカ・ノウア）が形成されたことによつて、ローマの支配に組み込まれていく。前二八年以降はアウグストゥスによる退役兵の植民活動と、属州の整理が行われ、二つの属州アフリカを併せ「属州アフリカ・プロコンスラリス」が成立した。

このように、共和政期よりローマ人の植民が行われ、帝政初期にも数多くのローマ人の植民都市が行われた地域が

新ポエニ語碑文から見る複数のポエニ文化とその利用（青木）

チュニジアであり、比較的新しくローマ帝国に組み込まれた地域がアルジェリア東部とリビア西部だと言える。

まずチュニジア、アルジェリア東部において、特に新ポエニ語碑文の出土数が多かった三つの都市と、ローマ人によって再建されたカルタゴを比較する。キルタは現在のアルジェリア東部、ゲルマとマクタリスは現在のチュニジアに位置する。この地域から出土した碑文を見ると、半分もしくは半分以上を奉納碑文が占めていることが分かる（表1）。各都市における奉納碑文の割合は、カルタゴは六七％、キルタは八二％、ゲルマは四五％、マクタリスは五四％であった。最も多く奉納されているバアル・ハモンは、前章で見た通り、元々カルタゴの主神であった。ちなみに、新ポエニ語碑文より前に使用されていたポエニ語碑文ではそのほとんどが奉納碑文であったため、その伝統を引き継いでいると考えることができる。

一方、リビア西部の碑文出土状況を見てみると、そもそも奉納碑文が非常に少ないことが分かる（表2）。レプキス・マグナは四％、サブラタは三％、オエアからは出土すらしていない。信仰されている神もバアル、シャドラバ、エルであり、バアル・ハモンの名前は見られない。また奉納碑文の代わりに多いのが、公共建築物の建設にあたって個人の名前を刻んだ碑文、いわゆる顕彰碑文である（表3）。

都市	碑文数	奉納碑文とその割合		備考
カルタゴ	15	10	67%	バアル・ハモン (11) タニト (8)
キルタ	90	74	82%	バアル・ハモン (50) タニト (13) バアル (11) バアル・アッディル (3)
ゲルマ	40	18	45%	バアル・ハモン (18)
マクタリス	134	73	54%	バアル・ハモン (60) バアル (9)

表1 チュニジア、アルジェリア東部における新ポエニ語碑文の内容とその割合

都市	碑文数	奉納碑文とその割合		備考
レプキス・マグナ	67	3	4%	バアル (1) シャドラバ (1)、エル (1)
サブラタ	31	1	3%	バアル (1)
オエア	9	0	0%	

表2 リビア西部における新ポエニ語碑文の内容とその割合

都市	碑文数	人の名前のみが記された碑とその割合	
レプキス・マグナ	67	41	61%
サブラタ	31	5	16%
オエア	9	5	56%

表3 リビア西部における新ポエニ語碑文の内容とその割合

都市	碑文数	人の名前のみが記された碑とその割合		備考
カルタゴ	15	2	13%	
キルタ	90	8	9%	
ゲルマ	40	0	0%	
マクタリス	134	51	38%	墓碑 (43)

表4 チュニジア、アルジェリア東部における新ポエニ語碑文の内容とその割合

顕彰碑文の割合は、レプキス・マグナで六一%、サブラタは一六%と少ないが、奉納碑文と比較すると数は多くなっている。またオエアでも五六%を占めている。

ではチュニジア、アルジェリア東部では人名のみを記した碑文はどの程度発見されているのだろうか（表4）。その割合はカルタゴでは一三%、キルタでは九%、ゲルマでは〇%、マクタリスでは三八%となっている。しかしこの中では比較的割合の高いマクタリスでも、そのほとんどが墓碑であることが分かっている。

以上、チュニジア、アルジェリア東部では奉納碑文が多く残存していたが、人名のみが記された碑文はとも少なかった。中でもカルタゴの主神バアル・ハモンが多く祀られていたことが分かった。一方のリビア西部は、奉納碑文ではなく顕彰碑文が多く、そもそもバアル・ハモンの名は出て来なかった。そもそもローマによって滅亡させられ、再建される以前のカルタゴの碑文の伝統として奉納碑文が建立されていたことを考えると、リビア西部における碑文建立の理由（顕彰碑文）は、そもそもカルタゴ的な伝統ではない。またレプキス・マグナで見つかった神シャドラパは、カルタゴではなくフェニキア本土で信仰された神であった。つまりレプキス・マグナに残存するポエニ文化は、カルタゴというよりもフェニキア本土の影響を残しつつ、

ギリシア・ローマ文化の伝統を受け入れていったと考えることができる。以上のように、ポエニ文化を残しつつ「ローマ化」を遂げたと言われるレプキス・マグナの文化は、宗教的側面や碑文建立の理由から見ると、カルタゴ文化ではなくフェニキア文化であったといえる。

次章では、カルタゴの主神バアル・ハモンを祀りながらも、その地域では例外的に人名のみの碑文が多く残存していた都市マクタリスの碑文に着目する。

3. マクタリスに見るポエニ文化

本章では、チュニジア、アルジェリア東部においてバアル・ハモンを祀っていた都市の一例としてマクタリスを取り上げる。

マクタリスは現在のチュニジアではマクタルと呼ばれる都市で、カルタゴから南西に一五〇km、海拔は九〇〇mの高地に位置している。前三―二世紀にヌミディア人によって建設され、前一四六年のカルタゴ滅亡に伴い、カルタゴから難民を受け入れて発展したと考えられている。前四六年にローマの属州アフリカ・ノウアに併合され、後一七六一一八〇年に植民市に昇格している。

以上のように、ローマ帝国の支配下に入った時期はレプ

キス・マグナと変わらない。しかしマクタリスの大きな特徴は、フェニキア人ではなくヌミディア人が作った都市であるという点である。マクタリスはヌミディア人が作った都市にも関わらず、バアル・ハモンというカルタゴの主神を祀っていたのである。本章ではマクタリスから出土した顕彰碑文を通じて、バアル・ハモンが祀られた背景について考察してみたい。

マクタリスから顕彰碑文は五点出土している。碑文全体における顕彰碑文の割合は四%である。例えばレプキス・マグナとマクタリスの顕彰碑文を比較すると、数の多い少ないよりも、内容の違いが際立つ。レプキス・マグナの顕彰碑文は全一二点で、そのうち五点は新ポエニ語とラテン語との二言語併用碑文となっている。ポエニ系の名前を持った人物やラテン系の名前を持った人物が、公共建築物を建立したことを讃える碑文が多く見つかっている。一方、マクタリスの顕彰碑文はラテン語との二言語併用ではなく、全て新ポエニ語で記されている。内容は個人が公共建築物を建立したことを讃えるといったものではなく、多数の名前を列挙するという形式のものが二点ある。

マクタリスの碑文は、その内容からおそらく神殿に掲げられたもので、神殿に属する三人のメンバーの名前が列挙されている(表5)。内訳はリビア系が一四名で四四%、

32名	リビア系		ポエニ系		ラテン系	
会員	14名	44%	9名	28%	5名	16%
父	21名	66%	9名	28%	0名	0%

表5 マクタリスにおいて新ポエニ語碑文に列挙された人名の内訳

ポエニ系が九名で二八%、ラテン系が五名で一六%。ほとんどの名前の記され方が「○○の息子」と書いてあるので、父親の名前も分かる。父親の内訳はリビア系が二一名で六六%、ポエニ系は九名で二八%、ラテン系はいなかった。単純に父親と息子の数を比較すると、この一世代でリビア系の名前が七名減り、ラテン系の名前が五名増えている。

そして、マクタリスには同じような碑文がラテン語でも記されている。後八八年に年代付けられるこの碑文を分析したバレイは、碑文に刻まれた本人の名前の内訳として、リビア系二名、ポエニ系二〇名、ラテン系三五名であったと述べている。父親の名前の内訳としては、リビア系が一一名、ポエニ系が

二三名、ラテン系が二五名であったという⁷⁾。単純に父親と息子の数を比較すると、リビア系の名前が九名減り、ポエニ系の名前が三名減り、ラテン系の名前が一〇名増えたことになる。

表5の新ポエニ語碑文と比べると、バレイイが分析したラテン語碑文にはリビア系の名前が圧倒的に少なくなっている。このことから表5の新ポエニ語碑文は、ラテン語碑文と比べて、少なくとも一、二世代以上前のもの、つまりこの地域が属州アフリカに併合された、紀元前一世紀後半から紀元後一世紀前半ではないかと推測することができる。

マクタリスにおける新ポエニ語碑文とラテン語碑文を比べると、リビア系が減っていく一方、ラテン系の名前が増えている傾向が見られ、ポエニ系の名前は時代を経てもあまり増減しないことが分かる。

表5で分析した碑文に記されていた、本人と父親の名前を列挙した(表6)。下線がリビア系の名前、二重下線がラテン系の名前、下線なしがポエニ系の名前である。注目すべきは、親は必ずリビア系かポエニ系であるということである。これは「ローマ化」の文脈で考えると当然で、親がラテン系で息子がリビア系やポエニ系の名前を持つようになる、ということは通常考えられない。

(1) <u>モンザマルの息子セルカニ</u>	(17) <u>アリシムの息子（…）</u>
(2) <u>plkayの息子マシル</u>	(18) <u>バルヤトンの息子カボ</u>
(3) <u>マスカラトの息子バルシャモ</u>	(19) <u>ガルガサトの息子ルキウス</u>
(4) <u>サルサミトの息子カピト</u>	(20) <u>バルヤトンの息子アブドメルカルト</u>
(5) <u>ヤスタタンの息子セルカニ</u>	(21) <u>バリクバルの息子シャブルガム</u>
(6) <u>ダバルの息子シャブルガム</u>	(22) <u>アディルバルの息子バッスス</u>
(7) <u>バリクバルの息子ムトゥンバル</u>	(23) <u>マシサン</u> の息子（…）
(8) <u>マスティバルの息子ルフス</u>	(24) <u>ダバル</u> の息子バリクバル
(9) <u>バワトの息子ムトゥンバル</u>	(25) <u>バルシレク</u> の息子（…）
(10) <u>ブビリ</u> の息子バルヤトン	(26) <u>バルヤトン</u> の息子 <u>ヤスクタン</u>
(11) （…） <u>ミルカルト</u> の息子 <u>ヤスクタン</u>	(27) <u>マラウゾ</u> の息子バルシャモ
(12) <u>アリシュ</u> の息子 <u>ヤスクタン</u>	(28) <u>マスカラト</u>
(13) <u>セルカニ</u> の息子ムトゥンバル	(29) <u>ガギラト</u> の息子バリクバル
(14) （…）の息子 <u>レスティウトウス</u>	(30) <u>女司祭</u> の息子 <u>ログトウス</u>
(15) <u>マルゾ</u> の息子 <u>アヤクナ</u>	(31) <u>ヤスタタン</u> の息子 <u>オゼルマン</u>
(16) <u>マスカラト</u> の息子 <u>セルカニ</u>	(32) <u>マシラン</u> の息子 <u>Awmazgwar</u>

表6 表5の詳しい内容

ポエニ史の文脈から考えると興味深いのが、リビア系からラテン系の名前になった人物が一名だけである一方、リビア系からポエニ系の名前になった人物が七名いることである。またポエニ系の名前からリビア系になったのは二名、ポエニ系からラテン系になったのは二名だということである。この結果だけを見ると、属州アフリカ形成初期のマクタリスでは、「ローマ化」ではなくむしろ「ポエニ化」が起こっていたと考えることができるのである。

おわりに

以上、本論では新ポエニ語碑文の分析から以下の二点が分かった。

一点目は、レプキス・マグナに残るポエニ文化がカルタゴ文化とは異なるという点。レプキス・マグナで信仰されていた神の名はカルタゴの主神バアル・ハモンではなく、シャドラパというフェニキア本土の神であった。また奉納碑文というカルタゴの伝統ではなく、公共建築物を奉献した個人を讃えるという碑文慣習にはローマ帝国の存在感が強く感じられる。つまり新ポエニ語碑文から分かるレプキス・マグナのポエニ文化は、決してカルタゴ文化と同一のものではなかったといえる。

二点目は、むしろカルタゴ文化を継承したように見えるのがマクタリスだったということである。マクタリスはフェニキア人が建設した都市ではなく、ヌミディア人が建設した都市であったと言われる。マクタリスには前一四六年のカルタゴ滅亡時に難民が移住したという説もあるが、今回の新ポエニ語碑文の分析によるとローマ帝国属州アフリカ形成期には「ローマ化」というよりも、「ポエニ化」を遂げていたことが分かった。しかし紀元後一世紀にはラテン語で碑文が記されるようになるため、少なくとも公共空間では新ポエニ語を使用する「ポエニ化」を経て、ラテン語を使用するようになる「ローマ化」へと移行していったと考えることができる。

私は以前、リビア西部内陸部から出土した新ポエニ語碑文について分析したことがある。その碑文はローマ皇帝ティベリウス治世の紀元後一五一七年に建立されたもので、*nksp* という人物がエジプトの神アンモンを祀る聖域を自費で建立したことを顕彰するものであった。まず碑文を建立した *nksp* の名前は、ポエニ人ではなくベルベル系のリビア人であると考えられている。このようにリビア人がアンモンを祀る碑文を通じて、新ポエニ語はポエニ人だけが使用していたわけではないことが明らかであった。このことも、ポエニ文化はカルタゴ文化と同一ではないし、

その利用のされ方も現地のポエニ人だけでなくリビア人の都合によってもさまざまな形があり得たことの証左となっている。

新ポエニ語碑文から見る複数のポエニ文化とその利用(青木)

註

- (1) F. B. Sear, "The theatre at Lepcis Magna and the development of Roman theatre design", *JRA* 3, 1990, pp. 376-382; J. B. Ward-Perkins, P. Kenrick (ed.), *The Severan Buildings of Lepcis Magna: An Architectural Survey*, Tripoli, 1993; W. Ball, *Rome In the East*, London and New York, 2000 等々参照。
- (2) J. B. Rives, Imperial Cult in Roman North Africa, *The Classical Journal* 96.4, 2001, pp.425-436.
- (3) S. Fontana, "Lepcis Magna: The Romanization of Major African City through Burial Evidence", in S. Keay and N. Terrenato eds., *Italy and The West: Compative Issues in Romanization*, Oxford, 2001, pp.161-172.
- (4) 井副剛「ローマ帝政前期北アフリカにおける文化的状況——トウンガにおけるサトゥルヌス神殿建設を中心に——」『文化史学』第六五号、二〇〇九年、二七七—二九八頁。
- (5) 佐藤育子「紀元前二千年紀におけるフェニキアの海外発展——宗教的側面を中心に——」『古代オリエント博物館研究紀要』二九／三〇号、二〇〇九—二〇一〇年、七八頁。
- (6) K. Jongeling, *Handbook of Neo-Punic Inscriptions*, Tübingen, 2008.
- (7) Z. Varhelyi, "What is the Evidence for the Survival of Punic Culture in Roman North Africa?", *Acta Antiqua Academiae Scientiarum Hungaricae*, vol.38, 1998, pp. 391-403.
- (8) 拙稿「古代ローマ帝国下トリポリタニアとガラマンテス——新ポエニ語碑文にみる紀元後一世紀のアンモン神崇拜を中心に——」『関西大学西洋史論叢』第二〇号、二〇一八年三月、一一—一二頁。
- (9) R. G. Goodchild, "Roman Sites on the Tarhuna Plateau of Tripolitania", *Papers of the British School at Rome* xix, 1951, p.95.

(関西国際大学非常勤講師)